〈シンポジウム〉フィヒテとスピノザ

シンポジウム
「フィヒテとスピノザ」報告

加藤　泰史

畠中尚志による岩波文庫版のスピノザの訳書には学生時代から随分とお世話になった。院生時代も含めてスピノザが演習でテクストとして取り上げられることはなかったが、読書会では常連であった。今から振り返ってみても畠中訳には深刻な誤訳は少ないのではないかと思う。スピノザに関してはその著作への関心ももちろん大きかったが、それ以上にレンズを磨いて生計を立てていたというその生涯にも魅了された。しかし現代的に考えれば、レンズは当時の最先端科学機器であり、それゆえに現代風に言えば、スピノザは一面ではある種のITエンジニアとも呼べるのではないか。そう思うと、寂寞感も薄れよう。

ところで、その「レンズ」である。スピノザは確かに「レンズ」を磨いていた。しかし同時に、スピノザ自身も強力な「レンズ」として機能することになる。例えば、ハイネの言葉を借りると、「今日のドイツ哲学者たちはみな(…)バルーフ・スピノザの磨いたレンズ(…)を通して物を見ている」(『ドイツ古典哲学の本質』)というわけである。この分析の重要性に気がつくのは後のことになるが、私自身も18世紀のドイツ哲学者たちがスピノザという「レンズ」を通してどのように物を見ていたのかを自分なりに分析したいと思うようになった。そうした計画を実現する機会が上野修の研究プロジェクトによって与えられた。すなわち、「近現代哲学における虚軸としてのスピノザ」である。この場合に「スピノザ・ルネサンス」は二度起きたと理解されている。一回目は「18世紀ドイツ」の「汎神論論争」からドイツ観念論の成立の時期であり、二回目は「20世紀フランス」、とりわけ1960年代から80年代にかけてアルチュセール門下が次々とスピノザ研究を公刊した時期である。スピノザの磨いた「レンズ」は二度にわたってはっきりと焦点を結んだことになる。そして今回のフィヒテ協会の「フィヒテとスピノザ」はある意味ではこれら二度の焦点につながる企画であったと言えよう。

フィヒテは言うまでもなく、「汎神論論争」からドイツ観念論の成立期に頭角を表し、まさにドイツ観念論の成立に貢献した当事者である。そのフィヒテがスピノザあるいはスピノザ主義とどのように向き合い、いかに受容したり批判したりしたのか。この問いに取り組んだのが入江幸男の「自由意志に対するスピノザの批判とフィヒテの擁護」であった。入江はすでに「フィヒテによるスピノザ批判」(『思想』、no.1080、2014年)および「フィヒテ知識学の展開におけるスピノザ批判の重要性」(『スピノザと近代ドイツ』、岩波書店、2022年)で、特に前期フィヒテの議論とその後期への転換を中心に論考を発表している。フィヒテはスピノザ哲学を最も整合的な実在論として高く評価しており、自らの体系か、あるいはスピノザかとさえ位置づけている。この二者択一的選択の最大の論点として入江が強調するのが「自由意志」の問題である。「自由意志」を擁護するフィヒテにとって「自由意志」を否定する最強の論者がスピノザであり、入江はフィヒテのスピノ

ザ批判が成功しているのかどうかを、デイヴィッドソンやダメットなどの現代英米分析哲学を補助線として活用しながら検討を加え、特に後期フィヒテのスピノザ批判に関して示唆を与えようと試みた。周知のように、前期フィヒテから後期フィヒテへの転換の一つの特徴は後期フィヒテが「絶対者」を明示的に容認するようになったことであり、そのためスピノザの汎神論との共通点が生じたからである。この点に関しては残念ながら当日に配布されたレジュメでも当日の議論でも具体的に展開されなかったが、キーワードはスピノザの「超越的自由概念」とフィヒテの「超越論的自由概念」の対比という形で示唆された。活字になった論考ではこの点の具体的論証を期待したい。

上野修は前述した研究プロジェクトを起点としながら、さらに科研費でスピノザ関係の研究プロジェクトを推進すると同時に、岩波書店から刊行中の『スピノザ全集』を鈴木泉とともに編集した。おそらくは日本スピノザ協会の多大な支援もあったのではないかと推測するが、いずれにしても現在のスピノザ研究の興隆に大きく寄与したことは紛れもない事実であろう。『スピノザ全集』の刊行がその潮流の主流であるとすると、上野修が杉山直樹と村松正隆とともに編集した『スピノザと十九世紀フランス』(岩波書店、2021年)はその支流と言えるかもしれない。この科研費の研究成果によれば、「18世紀ドイツ」の場合、スピノザ／スピノザ主義が様様な仕方で哲学者・文学者と肯定的または否定的に結び付くことでドイツ哲学の新たな地平／問題圏を切り開き(それはある意味で、スピノザの誤読の連鎖でもあり、皮肉にも正確な理解はヤコービではなかったか)、最終的にドイツ観念論を準備したのと比較すると、「19世紀フランス」でのスピノザ受容は見え辛かったのである。しかし教育制度等に焦点を当てることで、スピノザで結び付く「19世紀フランス」の思想史を浮かび上がらせることにこの論文集は成功したと言えるのではないか。すなわち、「18世紀ドイツ」の「スピノザ・コネクション」が哲学的なスピノザつながりであるのに対して、「19世紀フランス」の場合は教育制度的なスピノザつながりであって、このように「19世紀フランス」に「スピノザ・コネクション」を読み取った意義は大きいと高く評価できよう。しかも、「19世紀フランス」におけるスピノザ受容でキーパーソンになるのはクーザンであるが、「クーザンはドイツ哲学を摂取吸収しつつ、特にドイツ語圏の哲学史を通じてスピノザの意義を了解し始める」(ix頁)のである。クーザンはヘーゲルを通してスピノザを理解した。したがって、「19世紀フランス」におけるスピノザ受容はヘーゲルというレンズを通して行われたわけであり、そこでは同時にヘーゲル受容も随伴することになる。こうしたヘーゲル派のクーザンに的を絞ったため、この論文集では「19世紀フランス」におけるドイツ哲学受容に関してフィヒテの影は全く見出すことができない。米虫正巳の「フランスで出会ったフィヒテとスピノザ」はある意味でそうした欠如を補完する試みであったとも言えるだろう。

米虫正巳はこの「スピノザと十九世紀フランス」研究プロジェクトにも参加して「十九世紀末フランス哲学周辺のささやかなスピノザの影」を寄稿している。この論考ではガブリエル・タルドとスピノザの関係が主題化されている。今回はフィヒテに焦点を当て直して「20世紀初頭のフランス」におけるドイツ哲学受容を詳細に論じた(フィヒテは「19世紀前半のフランス」では『フランス革命論』等が紹介されていた)。その際に最初に取り上げられたのがグザヴィエ・レオンのフィヒテ研究であり、したがって、レオンを媒介にしながらフランスでフィヒテとスピノザが出会うことになる。レオンは、フィヒテとスピノザとの同一性と差異性に関して次の３点を中心にして検討する。すなわち、(１)〈倫理学としての哲学〉という哲学の位置づけ、(２)哲学上の方法、(３)

絶対者と有限なものの関係、の３点である。これら３点に関して詳細に分析する中で、特に（２）に関してフィヒテは、スピノザの『エチカ』が哲学的論証の形式そのものと高く評価したことが紹介されたが、それに関連して、非常に興味深いことに、1781年から1787年の間にフィヒテは直接『エチカ』を読んだとレオンが解釈していることも示された。ちょうどこの頃は「汎神論論争」の時期であり、まだスピノザの著作の入手が困難な時期でもあったので、重要な指摘であろう。それ以上に重要なのは（３）であり、米虫はレオン以前の「19世紀末フランス」のフィヒテ研究、すなわち、ヴィクトール・デルボスとルネ・ヴォルムスのフィヒテ研究にも立ち返って検討している。デルボスにせよ、ヴォルムスにしても、この時期にフィヒテとスピノザとの関係についてここまで詳しく論じていた研究がフランスで行われていたことに驚かざるを得ないが、さらに興味深いのは、米虫が詳細に紹介したデルボスとヴォルムスの両者は、前期フィヒテでもスピノザとの近さを強調し、さらに後期フィヒテでは公然とスピノザに傾斜したという解釈を示していたことである。ヴォルムスは「宗教的な考えによって（…）フィヒテは直接スピノザを模倣している」とさえ分析してみせた。入江の問題提起との関係で言えば、この後期フィヒテのスピノザへの接近に関わる分析が係争点となろう。米虫は再びレオンに立ち返りながら、「絶対者と有限なものの関係」に関わる後期フィヒテのスピノザ批判を独自に分析した上で、デルボスやヴォルムスらにはその回答が用意されていないことを指摘して、これらのフランス哲学者に代わって米虫は、そもそもスピノザ的実体ないし神は「一」なる「絶対者」でも「多」でもなく、その意味で後期フィヒテがスピノザに接近しながらもスピノザを批判した「一」から「多」への移行の行き詰まりは後期フィヒテがスピノザに強引に読み込もうとした疑似問題にすぎないと応答した。この応答に対する入江のさらなる応答が期待される。「どうするフィヒテ」。